女性にとっての「月経」経験
－ライフコースの視点からの考察－

加藤　朋江

1．はじめに

月経という、女性に特有の生理現象がある。医学的な定義によればそれは、「卵巣から分泌されるステロイドホルモンの消失によって起こる子宮内膜の剥奪性の出血」[森,1988:1]である。もっと一般的な表現をかりれば「一定の周期をもって反復する子宮内膜からの出血であり、その周期は24-38日」[後藤,1993:963]ということになろう。

今、ここで医学上の定義を用いたが、「生理」という呼称で一般的に語られていることから推測されるとおり(1)、この現象は「生理的な現象」であると認知されているということが、ひとまずいえる。すなわち、平均的な周期や経血の量といったことがらの数値的測定がはかられ、その逸脱や随伴現象（腹痛，腰痛等）の有無が「月経異常」として治療の対象とされる、医学や生物学の領域における「月経」が存在する。

と同時に、この生理現象やその当事者である女性の扱いをめぐる、いくつかの特殊性が文化的に存在する、ということも認識されている。たとえば文化人類学、あるいは民俗学は、月経期間中の女性が日常とは違う状況に置かれていることや、その内容や強度が文化や社会集団によって異なることを、「タブー」「ケガレ」等の語によって繰り返し説明してきた。あるいは月経血そのものに着目し、やはりそれを「シンボル」という言葉によって特殊なものとして認識してきた(2)。

つまり、月経という現象は、定期的な生殖器からの横溢である、と医学的に定義される生理現象であると同時に、その現象やそれに関わる女性の身体への位置づけ・扱い方が社会や文化によって大きく異なる社会現象でもあるという

ことが知られているといえる。

ところで、医学的な関心や文化人類学的な関心とはちがう、月経に関する新たな研究が行われるようになったように思われる。それらは、出産研究の一環として女性の生理現象である経験を記述するこころみであったり、月経における経血の処置に用いる生理用品を素材とした社会史研究の形式をとっている[3]。

後者にかんしては、「アンネナプキン」に代表される個別の商品の登場とその背景（需要や開発のための技術）そのものに着目し、以前と以後における女性の日常における身体感覚のちがいを見いだそうとするものがある。このような研究が行われること自体に、「語られるものとしての月経」という社会的な了解の根拠をもとめることが可能であろう。

だが、月経や生理用品に関する研究がようやく行われるようになった現在においても、当事者である女性たちが日常的に月経とどうかかわり、月経をどう解釈しているのか、等のことは明らかにされていない。

本稿では、ライフコースの視点に依拠して、女性にとって「月経」がどのようにその個人に受容されているのかを主として事例調査の分析によっておこなう。具体的には、月経をめぐる社会環境（商品化された生理用品などのモノ、月経を語ることが可能な空間）の変化と、個人の社会的なライフイベント（進学、就職）及び身体的なライフイベント（妊娠、出産など）の変化との２つの流れのなかで、当事者にとっての月経の位置づけを明らかにする。資料としては、聞き取りと記述によって得られたデータを用いる。ここでの目的は、世代における月経の解釈や体験の相違を検証することにある。

2　調査と分析の方法

使用するデータは、筆者が1992年6月から9月にかけて、「女性と生理に関する調査」（東京女子大学樽川ゼミ）に参加したときのものである。ここでは、東京女子大学の学部生とともに20代から70代にわたる女性（主に関東在住）に対して聞き取り調査を行った。また、1994年7、8月に7ケースの調査を追加し

て行っている。

内容としては、月経を身体にとってのひとつのライフイベントととらえ、その後の「月経を日常的に体験していく身体」を、就学・就職・結婚などの社会生活上のライフイベント、および性的な経験、妊娠、出産などといった身体的なライフイベントのかかわりの中で述べてもらうというものである。おおまかな項目として「初潮のころのこと」「使用した生理用品」「月経の話題」「月経観とその変化」の４つを柱とした。

調査時間は１件あたり１時間程度である。なお、聞き取り調査対象者は調査者にとっての近親者である場合と、まったくの初対面である場合の両方を含んでいる。また、聞き取り調査と並行して調査者自身の月経体験についても記述してもらった。以上のようにして得られたデータは全部で47件である。出生コーホート別のインフォーマントの内訳は以下の通りである。

年齢(94年現在)	出　生　年	調査対象者数
２０代	１９７０年代前半－１９６０年代後半	９人
３４－４４歳	１９６０年代前半－１９５０年代後半	７人
４５－４９歳	１９５０年代前半－１９４０年代後半	１０人
５０－５４歳	１９４０年代前半－１９３０年代後半	１５人
５５－５９歳	１９３０年代前半	３人
６０－６９歳	１９２０年代	１人
７０代	１９１０年代	２人
		計４７人

以下に続く分析では、まず初潮を身体にとってのライフイベントの一つとして捉え、その時点における環境について「制度」（初潮教育）、「モノ」（生理用品等)、「言葉」（初潮を語る相手）を軸に世代間の比較を行う。初潮を独

立した項目として挙げた理由はいくつかある。まず、それが女性にとって非常によく記憶されたイベントであるということである。実際の調査の中で、インフォーマントのほとんどは自分の初潮年齢と時期を記憶しており、正確な月日を挙げることが可能な人も多かった。また、初潮時は時期を特定しやすいために、世代を超えて比較可能な変数であるということも大きい。

次に、生理用品そのものとの関わりについて分析する。毎月の月経時においてその処置ということが必要とされるが、当事者以外には見えにくい月経という現象を可視的なものにしている商品として生理用品があるといえるだろう。ここでは商品の携行や購入についての行動や意識を中心に分析している。

また、自分自身の月経現象について話題にするか、するとすれば話題可能な相手がどの範囲に及ぶのか、またどのような文脈で月経が語られるかということについて比較を行う。

最後に、対象者にとっての「月経」とはどういうものであるかを聞き、月経をとりまく状況がどう変化したのか、あるいは月経の位置づけに変化があったかどうかをみていく。なお、以下に続く分析と併せて、本稿末尾の表を参照されたい。

3　分析

(1)ライフイベントとしての初潮

調査対象者が自分の初潮をどう受けとめたかに関しては、コード化が困難なほど多様な意見が述べられている。大まかにいって、負担感や戸惑いを感じたという者が半数を占め、残りは初潮が無事自分の身体にめぐってきたことに対する安堵を感じた者、特に何の感慨も無かった者に分かれる。初潮観を決めたものとしては「初潮年齢」「受けた初潮教育」「周囲（とりわけ母）の態度」が個人的な規定要因としてまず挙げられる。

「私はクラスの中でも早い方だったと思う。20人のなかで４、５番目だった。（中略）生理になっている子は『ませている』というイメー

ジがあった。だからあまり友人には言いたくなかった（1971年出生）」

「私にもきたかと思ってほっとした（1934年出生）」

初潮年齢は、医学的な統計調査にしたがった「平均初潮年齢」という基準ではなく、本人の所属する集団のなかにおける相対的な早い／遅いという判断であることがわかる。初潮年齢が相対的に早いと周囲に相談できる友人がいないこともあり、その負担感は大きい。一方、周囲に初潮を迎える者が出始めると自分が始まらないことで焦りを覚える。

初潮の知識については、小学校５、６年生のときに学校で女子のみの初潮教育を受けたという答えが全体の７割強を占めている。学校での性教育によって月経の存在を知ったという回答は、ほぼ全ての世代にわたって見られた。

「学校では、女の子だけが集められ、月経のことを説明するための、10年くらい前に作られたんじゃないかと思われるような古くさいフィルムを見せられ、保健の先生が話をしてくれた。それまでに性に関する知識がゼロだった私は、女性に月経というものがあるということ、そしてそれが子どもを産むための準備だということを知って、たいへん驚いた。（中略）具体的なイメージがわからず、実際に初潮があったときよりも、月経を知った時点の方がショックが大きかった（1971年出生）」

学校での初潮教育以外では母親や姉、友人などの身近な同性によって月経の知識が知らされることが多い。

また、自分自身の初潮に対して、直接接触する周囲の他者がどのように評価したかということも初潮観やその後の月経観を決める。

「父や母に祝福されればうれしくはあったが、はずかしさや照れといったものはなかったように思う。母も父も『おめでとう』と私に言ってくれ、赤飯で祝ってくれて、私の初潮はすんなりとつつましやかに祝われた（1971年出生）」

「親に罪悪のように言われる（1945年出生）」

「母のおかげでいい感じに受けとめる（1927年出生）」

出生コーホートによる初潮時の状況のちがいを表すものとしては「使用生理用品」のちがいと、「自分の初潮を話題にできたか」ということが挙げられる。

戦後の日本における製品化された生理用ナプキンの発売は1961（昭和36）年である。1950年代後半出生コーホートでは初潮時に製品化された生理用ナプキンを用いているのに対し、40年代後半から50年代前半生まれの者は、脱脂綿処置からナプキン利用のちょうど過渡期にいる。

「初潮の話題」については、1950年代以降生まれが例外なく自分の初潮を母親に報告しているのに対し、1950年代後半以前に生まれた者では「家庭内や学校で話す雰囲気ではなかった」と語っていた人が多い。これが、のちに述べる「過去より現在の方が、社会的に月経がオープンになった」とする評価を裏付ける一つの根拠となっている。

(2)月経の話題

月経という現象は女性に特有のものであり、またかなり性的な意味あいをもち、個人的な領域に属すると考えられているが、この現象について女性たちがどのような内容のことを、だれに話題にするかといった表現の形式には、はっきりと出生コーホートによる差が見られた。即ち、1940年代後半以降に生まれた女性たちが、「家庭内や親しい人と『オープン』に話をする」、と答えるのに対し、40年代半ば以前に出生した女性ではその割合がかなり下がる。そして「話す必要がない」「話をするべきではないという雰囲気」により話題は避けられる。

また、「話題にする」者でも「価値観の変容」「医師にきかれた」「子どもにきかれた」等、何らかの条件をつけ加える傾向がある。さらに調査時に50代の女性については、初潮時から現在にいたるまで、母親や姉妹にも自分の月経の話をしたことがないと答え、60代ではかなり意識的に月経の話題を避けてきている。これらは、月経の話題にたいするタブー性が強いコーホートグループと弱いコーホートグループがあることを示している。

(3)使用した生理用品

使用生理用品は、1970年代以降に初潮を迎えた者では現在市販されている生

理用ナプキンを利用している。商品化された生理用品が一般に普及、品質の向上が図られるのが1960年代にあたるので、1960年代後半くらいまでは脱脂綿で初潮の手当をした者が含まれる。また、1960年代前半以前の生理用品に関して注目されるのは黒色の生理帯の使用である。これは広い年代に渡って記憶されている。上野千鶴子はこの黒色の生理帯にふれて「黒というのは喪章にも使われるように、穢れのイメージ」があり「物忌みを意味する不吉な色」としての、心理的な効果が大きかったと述べているが[上野,1989:52]、実際に生理帯や下着の色に対する言及が1940年代以前に出生した者に多く見られた。

ジョージ(George,A.)とマーコット(Murcott,A.)は、英国の女性たちが毎月必要な生理用品をいかに人に見られないように苦心して購入しているかということを'Monthly Strategies'という表現で示している[George & Murcott, 1992:146-162]。日本においても小野清美が言うように、生理用品はある種の「無言の買い方と、無言の売られかたをしている」[小野,1989:116]商品であり、包装や店員の性別を気にする人もいる。生理用品の購入にともなう気遣いについては、世代の差よりも個人の加齢が、その行動を規定している。「初潮時や学生時代は恥ずかしかったが現在は購入や携行にそれほど気を遣わない」ということが全ての世代を通じて言われている。これには、「個人の加齢」という要素と同時に、スーパーマーケットやコンビニエンスストアによる入手経路の拡大も大きく関わっている。

「今のようにナプキンが目に付くところで山積みになっていたり、CMをしたりは、昔は考えられなかった（1945年前後出生）」

「昭和40年代からスーパーで購入。今みたいにオープンでなかった（1938年出生）」

生理用品が他の衛生用品と同じように売られることによる、商品の匿名化の影響も大きいといえるだろう。

「中学校からずっと女子校だったんですね。だからわりとオープンだった。変な話なんだけど、タンポンとかナプキンとか部屋のはしからはしまで投げて。そういう世界だった（1960年出生）」

学校や職場における生理用品の携行に関しては、1960年代以降生まれの者が、

女子校における生理用品を隠さない空間について語っているのにたいし、それ以前の出生者では女子校でも、「ハンカチに包む」「貸し借りをしなかった」という生理用品を隠すという答えになる。

(4)月経をめぐる状況の変化

月経観は、「身体の一機能」「健康のバロメーター」というように生理的な機能として捉えられる場合と、「女性の特権」「子どもが産める」と女性性に結びつけられる場合、「煩わしい」「女として損」という否定的な意見に分けられる。否定的意見は、1970年代出生者、1950年代出生者に１名ずつしか見られなかったのに対し、1940年代前半以前の出生者では半数以上が挙げている。若い世代では「生理が重い」「生理痛がきつい」など、月経随伴現象による意見であるのに対し、1940年代以前の出生者では、月経血処置の煩雑さや、月経という現象それ自体に対する否定感が強く表されている。

また、月経観と同時に、現在における当事者の月経観や月経をめぐる社会的な状況に変化があったかどうかをきいてみた。聞き取り調査を実際に行ってみて、あるいは記述された女子学生の月経体験記を一読して気づくことが、月経に関して「オープンになった」という評価がかなり広い範囲にわたって存在するということである。これは、どのコーホート集団にも共通して見られた。ただし、その中身における比較軸、評価の対象、原因がちがう。

ａ．比較軸

現在の自分と、何を比較した場合に「オープン」であると言えるのか。これは大きく次の３つに分かれる。

①自分と過去の自分。「若いより現在の自分のほうがオープン」という言い方がほとんど全ての年代層にわたってみられた。

「年をとるにつれて心身ともに負担が軽くなった（1971年出生）」

のように、70年代生まれの者ですら中学・高校時代における自分と現在の自分を比較し、過去－現在という軸を用いている。このような個人的な加齢という

要因によってオープンさが表出したとする説明とともに、「社会的な要因」を挙げる者も多い。

「周囲のとらえ方も汚いとか不潔とかいうものではなくなった（1947年出生）」

つまり、過去よりも現在の方が社会が月経をオープンにしている、という判断である。

②自分と自分の娘（娘世代の女性）。すでに初潮を迎えた娘がいる、1950年代以前に出生した世代では、娘と、娘のころの自分との比較が行われる。

「小４の長女が学校で生理教育を受け、ナプキンをもらって喜んで帰ってきた。自分たちと違うと思い、人生がふくらんだ（1953年出生）」

「娘たちの態度。自分らにはないオープンさがある（1938年出生）」

③母親世代になった自分と、同じ年代だったころの自分の母親。

「昔は大人が恥ずかしがって生理のことを教えてくれなかった（1936年出生）」

自分が少女時代に母親が見せていた態度と、現在同じ年齢になった自分を比較した場合、「オープン」であるという評価がある。これは、加齢が必ずしも月経の「オープンさ」を招くものではないことを示す。むしろ、加齢ということが月経をオープンにするという認識が生じた、というほうが正しいだろう。

b．評価の対象

何に対して「オープン」という評価を与えるのか。大きく次の３点にわけることができる。

①月経の話題。自分自身の月経や一般的な月経の知識を話題にできるようになること。あるいは、話題にする対象が家族、内輪の人間から、より広い範囲、あるいは男性へと増幅すること。

「中学時代から友人があけすけに話していたので楽になる(1971年出生)」

「大学に入ってからボーイフレンドが理解をしめしてくれたこと(1970年出生）」

「家庭の中で話題にできること（1946年出生)」

②生理用品購入・携行における気遣いの負担が減ること。

「私が買いに行っていた薬局は店員がおばさんだったから平気というわけでもないけど、男のお客さんいたらやはり買えないで、いなくなったからさっと買ってた。今は、オープンだけどね（1954年出生）」

③日常的に「月経」という話題に触れる頻度が増加すること。テレビにおける生理用品コマーシャルや、スーパー・コンビニエンスストアにおける生理用品の配置場所等の広がりがこれにあたる。

「生理用品をきっかけに話がしやすくなった（1951年出生）」

c．原因

オープンになったとする評価の原因については、個人的な理由と社会的な理由の２つの説明があった。

個人的な理由としては、①加齢、月経の日常化、②社会的経験（進学、就職、上京や海外経験など価値観の変化）、③身体的経験（性的経験、妊娠、出産、閉経、病気）が挙げられる。また、社会的な理由としては、④性や身体に関することがらの表現の変容、⑤生理用品の出現、商品化による処置の負担の軽減という回答があった。

世代による相違という点でみると、1970年代出生コーホートが自らの月経観を「オープン」であると評価する場合、ほとんどが①②に理由づけられる。

1960年代に初潮を迎えた人たちは、脱脂綿と生理用品の２種類の月経処置を経験している。対象となる1940年出生者には、アンネナプキンに代表される生理用品が販売されたときのことを言及するものが多く、⑤を変化の理由として挙げている。また、「月経の話題がオープンになった」ということを自分の娘との比較の上で実感することから、若い娘を持つ年代である。1950年代前半－1930年代後半の出生者に④を挙げる者が多い。

4．おわりに

分析を終えてみて、世代間の比較においてまとめられることを記述しておく。

まず、初潮時においては、月経処置の方式そのものに世代による体験のちがいが現れるということ。1950年前半以前の出生者は脱脂綿による月経血処置を体験しており、非常に煩雑な月経との関わり方をしていた。その後、1961(昭和36)年に発売されたアンネナプキンを皮切りに、その後次々と国産の生理用品が普及しはじめ、1970年代には全国どこでもこの製品が普及した。このころに初潮を迎えた者たちくらいから、初潮の受容の状況が微妙に変化する。まず、それは必ず母親に話されるべきイベントとして受けとめられる。家庭内や親密な同性との空間においては、自分の月経が以前より公にされている。そうした自分の月経を隠さない娘たちの態度によって、母親たちが再教育されるという構図が見える。

また、社会の中に性や身体に関して語りやすい空気が生まれたとする評価が1950年代前半－1930年代後半出生者に顕著である。これは、前述の娘世代からの影響、商品化された生理用品による月経の顕在化など、様々な理由が言えるだろう。

月経という現象自体にかんする評価も、1950年代以前の出生者では月経随伴現象を理由とする不快感を示すのに対し、1940年代以前の出生者では、月経という現象それ自体に対するネガティブなイメージがうかがえる。

こうした、月経という現象に対する当事者側の評価の変遷、月経を語る空間の変容ということに関しては、生理用品の商品化や消費という歴史的事実と同時にそのことによって引き起こされた、性や身体を語る空間の変容といったことも月経の研究に関する今後の重要な課題となるだろう。

いずれにせよ、本稿ではおおまかな世代による差を確認するにとどめ、月経を語る空間のより構造的な背景については稿を改めて検討したい。

事　例　調　査　結　果

No	年齢	出生年	属性	使用生理用品	初潮期，そのときの状況
1	21	1971 (S46)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝのみ	あまり何とも思わなかった
2	21	1971 (S46)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝのみ	特に不安もなく感動もなし
3	22	1970 (S45)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝ，ﾀﾝﾎﾟﾝ	なんとなく，口にすると恥かしい
4	21	1971 (S46)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝ	母にはなんとなく言いづらかった
5	21	1971 (S46)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝ	ｸﾗｽの女子20人のうち4，5番目．あまり友人には言いたくない
6	21	1971 (S46)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝ	初潮が早かったので友人には切出せなかった周りの子が半分位そうなってから告げた
7	21	1971 (S46)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝ	両親に祝福され嬉しかった
8	23	1969 (S44)	学生	ﾅﾌﾟｷﾝ，ﾀﾝﾎﾟﾝ	ほっとした
9	27	1965 (S40)	保母，結婚後は専業主婦	ﾅﾌﾟｷﾝのみ	―
10	34	1960 (S35)	事務職，結婚後は専業主婦	ﾅﾌﾟｷﾝ，学生時代はﾀﾝﾎﾟﾝ	標準的にきたな．とにかく男の人に知られたくない
11	36	1958 (S33)	教員，結婚後退職，現在はアルバイト	ﾅﾌﾟｷﾝのみ	驚かなかった．その時代としては早い方
12	38	1954 (S29)	保母	ﾅﾌﾟｷﾝのみ	ぞっとした/安心感．仲間入り．清潔にするように母に言われる
13	40	1954 (S29)	事務職	最初の1，2回は脱脂綿	恥かしい．ｵｰﾌﾟﾝに話ができなかった．お祝は拒否
14	39	1953 (S28)	公務員	ﾅﾌﾟｷﾝ，体操部なのでﾀﾝﾎﾟﾝ	友達の半分は初潮を迎えていた

月経観	月経にまつわる状況の変化	No
女性だけが体験できる特権. 出産と関連して自分は女であると確認させられる. 出産と較べると日常化, 当然化	受験で上京中に生理痛にみまわれたが, それ以外は辛くなく, 友人にも話せるし, 年を取るにつれて心身共に負担が軽くなった. 住んでいる環境の影響. 明るく話せる友人の性格, 社会的にも生理がﾀﾌﾞｰ視されなくなったため	1
健康のﾊﾞﾛﾒｰﾀｰの役割を果たしているという, ﾎﾟｼﾞﾃｨﾌﾞな捉え方. 女性であることを自分にみせつけてくれるもの	高校に入るとﾈｶﾞﾃｨﾌﾞなｲﾒｰｼﾞから解放された友人の影響＋保健体育の授業＋自分自身の周期の安定	2
特に意識しない. 文字どおり一つの生理現象	大学に入ってから交際しているＢＦが理解を示してくれたこと	3
女として当然の事	高校の保健の授業で生理を性交と結び付けられることを知りｼｮｯｸ. 生理=いやらしいものと認識. だが年を重ねるうちに自然と当然なこと, と変化	4
生理がなければどんなにいいだろう. 生理があることにより生活が4分の3になり, 女として損	生理が重くなったこと	5
女性全員に共通してあるもの	初潮が早かったので最初は暗かったが, 中学時代から友人があけすけに話していたので楽になる	6
―	―	7
ﾎﾟｼﾞﾃｨﾌﾞなｲﾒｰｼﾞ. ほとんど全ての女性が経験している当然の現象	一人暮しで自己管理を始めたこと, ﾖｰｶﾞで月経痛から解放されたこと	8
結婚する前もした後も, 妊娠も含めた体の具合の目安	学校, 職場と女性ばかりの環境なので, ずっと月経に対して明るいｲﾒｰｼﾞ	9
―	子どもがもう一人欲しいので閉経を計算に入れないと, と考えている	10
体の一機能	生理痛のひどい友人を見て, 生理休暇の意味ってあるなあと思った	11
―	―	12
閉経を意識しだした. 生理があるうちが女, という考え方に反発	友人や家族への生理の話題/生理用品の購入がｵｰﾌﾟﾝ	13
毎月きちんとあることが健康の証だと, 閉経期女性の話をきいて思う	小4の長女が学校で生理教育を受け, ﾅﾌﾟｷﾝをもらって嬉んで帰ってきた. 自分たちと違うと思い, 人生が膨らんだ. いい事だと思う	14

No	年齢	出生年	属性	使用生理用品	初潮観，そのときの状況
15	41	1951 (S26)	養護学級教諭	ｱﾝﾈﾅﾌﾟｷﾝ，下着は黒	恥かしかった
16	41	1951 (S26)	結婚後，家業手伝い	ﾅﾌﾟｷﾝ，生理帯	おとなしくなった
17	43	1949 (S24)	ｲﾍﾞﾝﾄ会社設立	最初は脱脂綿，1，2年後にﾅﾌﾟｷﾝ	友達にｵｰﾌﾟﾝに話した記憶なし
18	45	1947 (S22)	公務員	ｶｯﾄ綿，脱脂綿	秘め事のように扱う
19	45	1947 (S22)	主婦	脱脂綿，すぐにｱﾝﾈが発売	隠しておきたいけど言ってもみたい
20	48	1946 (S21)	結婚後，非常勤講師	脱脂綿，15歳からｱﾝﾈﾅﾌﾟｷﾝ	ｼｮｯｸではなかった
21	48	1946 (S21)	化粧品ｾｰﾙｽ	ｶｯﾄ綿，ﾃｨｯｼｭ，生理帯	戸惑う．今みたいに話題にできなかった
22	40後	1945 (S20) 前後	ﾊﾟｰﾄﾀｲﾏｰ	脱脂綿，黒のｼｮｰﾂ	夏に脱脂綿を当てるなんて気持ち悪い
23	40後	1945 (S20) 前後	主婦	脱脂綿，高校からﾅﾌﾟｷﾝ	女子校だったが話す雰囲気ではなかった
24	47	1945 (S20)	出版社勤務	新聞紙，ｶｯﾄ綿，ちり紙	なんの感激もない
25	47	1945 (S20)	電話交換手，結婚後家業手伝い	脱脂綿，すぐにﾅﾌﾟｷﾝ	ひたすら隠していた
26	47	1945 (S20)	―	落とし紙，脱脂綿，黒い生理ﾊﾞﾝﾄﾞ，S38からﾅﾌﾟｷﾝ	知識が無い時にきて驚いた．親に罪悪のように言われる
27	48	1944 (S19)	結婚前は事務職	脱脂綿，T字帯，S36からﾅﾌﾟｷﾝ	びっくりした
28	49	1943 (S18)	教師，結婚後専業主婦	脱脂綿，黒いｼｮｰﾂ，すぐにﾅﾌﾟｷﾝ	母に相談しなかった
29	49	1943 (S18)	会社員	ｶｯﾄ綿，すぐにﾅﾌﾟｷﾝ	母は話題にすることを下品に思っていた
30	50	1942 (S17)	専業主婦	脱脂綿，黒いｺﾞﾑの生理帯	ただびっくりした

月経観	月経にまつわる状況の変化	No
生理痛がある時は女性で損だと思う	小5の娘は今から初潮を楽しみにしている.幸せだなと思う/だが,ｵｰﾌﾟﾝになったという気持ちと生徒への指導が矛盾	15
女の子としてあたりまえ.そんなに変にも考えないし大きく取上げることもない	娘たちのような,今の子は恥かしがらない	16
女性を汚いとする考えはすごくｲﾔ	友人の娘は可愛いｼｮｰﾂを前に,初潮を楽しみにしている.生理用品をきっかけに話がしやすい	17
生理は健康のﾊﾞﾛﾒｰﾀｰ.今になってあった方がよく,ないと淋しい	育った家では月経の話題は秘め事.今の子のｵｰﾌﾟﾝさにはびっくりする	18
生理がなかったら性殖の意味も男女がいる意味もない	周囲のとらえ方も汚いとか不潔というものではなくなった/ﾌﾟｰﾙにも入れるようになったが衛生面で心配	19
検診のための指標.生理で苦しんでいないので,特別の事ではない	ｱﾝﾈの出現,異文化生活によって変化/出産によって規則的になったことも大きい.娘たちを見て受けとめかたのちがいを感じる	20
この年代になると,あると煩わしいけどないと不愉快になってくる	家庭の中で話題にできること.出産や子への教育でｵｰﾌﾟﾝになった.年代的に,世間が生理をｵｰﾌﾟﾝにしたころと同じ/年齢的に病気がらみで相談しやすくなった	21
煩わしい.喜びなど感じない	ｲﾒｰｼﾞが全体的にｵｰﾌﾟﾝになり,女性の負担も軽い.ﾅﾌﾟｷﾝの性能向上,ｹｶﾞﾚ観の消失による	22
―	隠すべきものから開かれたものへ/自分自身も抵抗がないが,女性としての恥じらいをなくしてはいけない	23
生理のこと自体が不快	―	24
若い頃は隠したが,隠すべきものでなく女性として当然の事	性教育の内容/生理用品の購入	25
こんなのなんともない/一番最初の知識が間違ってるのってとても怖い	ﾍﾟｰﾙに隠されているものはある程度開いた方がいいという考えに変化	26
体の状態のﾊﾞﾛﾒｰﾀｰ	若い時は面倒.生理を経験したことで男女の違いを意識.負担に思う.結婚して意識が変った/学校の性教育の内容	27
明るいｲﾒｰｼﾞはほとんどない.煩わしさが先に立つ	期間中の行動範囲の広がり(ｽﾎﾟｰﾂなど)/生理は病気じゃないという風潮,昔の方が女性は保護されていたのではないか	28
煩わしい.会社に勤めていると女性としてのﾊﾝﾃﾞｨと感じる	特に自分の意識で変ったところはない	29
あくまでも個人的な生理現象	生理用品の変遷について記憶にない/娘たちの態度を見ると社会のとらえ方の変化が大きいと思う	30

No	年齢	出生年	属性	使用生理用品	初潮期, そのときの状況
31	50位	1942 (S17) 位	ﾍﾞﾋﾞｰｼｯﾀｰ	脱脂綿	知識があったので慌てなかった
32	50位	1942 (S17) 位	主婦	脱脂綿, 黒の生理帯	自分が迎えてから友人がそうであることを知った
33	50前	1930 (S10) 後半	研究職	脱脂綿, 60年代よりｱﾝﾈ	時代が時代なのでお祝ところではない
34	50	1942 (S17)	―	脱脂綿, ｺﾞﾑ貼りのｼｮｰﾂ	ひっそり隠すような感じ
35	50	1942 (S17)	結婚前に会社勤務	ｶｯﾄ綿, 中2のとき白十字社製ﾅﾌﾟｷﾝ	女子校だったけど, 今みたいにｵｰﾌﾟﾝには話さなかった
36	52	1940 (S15)	―	脱脂綿, ｶｯﾄ綿, ﾃｨｯｼｭ, 黒いｼｮｰﾂ	病気になったと思った
37	55	1939 (S14)	結婚前は教師	脱脂綿, 手製のT字帯	びっくりした. 母は祝う余裕がなかった
38	56	1938 (S13)	結婚前は学校事務	脱脂綿, ちり紙, ｱﾝﾈ以前に製品を使った	ｼｮｯｸもあったけど, こんなもんかな
39	54	1938 (S13)	ﾊﾟｰﾄﾀｲﾏｰ	脱脂綿	家で話題にするなんてもってのほか. 学校でもみんな秘してた
40	56	1936 (S11)	―	布団の布, ちり紙	あまり大っぴらに話す時代ではなかった. お祝なし
41	56	1936 (S11)	専業主婦	脱脂綿, 黒の生理帯	母からも学校からも教えてもらえず, 驚いた
42	58	1934 (S 9)	主婦	ｶｯﾄ綿, ちり紙	私にもきたか. 当時はみんな貧しかったのでお祝はなし
43	59	1933 (S 8)	ﾊﾟｰﾄﾀｲﾏｰ	脱脂綿, T字ﾊﾟﾝﾄﾞ, ちり紙	驚かなかった. 女性として当然. 戦時中なのでお祝なし
44	60位	1932 (S 7) 位	福祉関係	脱脂綿, 布団綿, 黒いｼｮｰﾂ	母親にも言わなかった
45	65	1927 (S 2)	―	脱脂綿, ちり紙	知識がなく驚く. 母のおかげでその後はいい感じに受け止める
46	77	1915 (T 4)	―	脱脂綿, 木綿の黒いﾊﾟﾝﾂ, T字帯, ｶﾞｰｾﾞ	覚えていない
47	78	1914 (T 3)	専業主婦	脱脂綿, ｶﾞｰｾﾞ	はやくもおそくもない

月経観	月経にまつわる状況の変化	No
なきゃ楽だろうな,としか思わない	生理の話題をすること.30を過ぎ,出産をしてから恥ずかしくなくなった	31
なければ楽だが骨粗しょう症になるときいているので恐い	自分の意識の変化.結婚,出産による.生理がからだに馴染んだからかもしれない	32
―	―	33
ただただうっとおしい.周期が不安定で旅行にぶつかることも多く嫌.女に生まれて損.娘が初潮のとき可哀想に思った	生理に対する考えはずっと変らない	34
特に何とも思わない.女である以上仕方がない	CMのやりすぎはよくない	35
生理がちゃんとあり子どもが産めるすばらしさを感じるようになった	自分自身の生理観.若い頃は考えられなかった	36
どうして神様は女性にだけこんな煩わしいことを,と思う	話題にできること.周囲の影響,妊娠.出産の経験/自分自身の月経観の変化.閉経して,煩わしくなくていいと思う一方,女性の条件が抜ける気がした	37
閉経しているのでﾒﾝｽのあるころが一番女らしいかなという気がする	娘たちの態度.自分らにはないｵｰﾌﾟﾝさがある	38
老廃物が出て行く,きれいになる	情報の選択肢の広がり.学校教育,友人などによって親にきく必要がなくなったのでは/月経の話題ができること	39
―	―	40
期間が長いからいやだという意識が強い.生理が出産と結びつかず,煩わしく思えた	学校における生理教育.昔はおとなが恥ずかしがって教えてくれなかった	41
煩わしさや制約もあるが健康の証	ケガレ観がなくなったこと.昔はあった.むしろ女性は神聖視されてもいい	42
女性の特権.生理のある女性は女としての性を謳歌している	生理休暇があるゆえの制約があるのでは?	43
閉経により,煩わしさから解放さばさばした.女性がこれで終わったという感じはない	―	44
自分が女であることを自覚できるもの/わずらわしい点では損	友人同志で話題にできること	45
―	―	46
生理はあると煩わしいけれどなくなると淋しい	―	47

<注>

(1) 月経という語よりも生理という呼称のほうが一般的であるとの判断により、本稿で用いる調査においては「生理」の語を用いている。日本における月経の呼称については、[Kittredge,1987=1990:19-21]に関連の記述がある。

(2) 文化人類学や民俗学の領域では、波平恵美子の業績に代表されるケガレとしての月経研究[波平,1985,1983→1992]や、瀬川清子による月経時における習俗等の研究の蓄積がある[瀬川,1980]。「シンボル」としての月経については、[Douglas ,1969=1985]を参照。

(3) たとえば、[天野・桜井,1992:63-82]、[蒲田他,1990:3-11][川村,1994:108-177]、[小野,1989,1993]、[水牛くらぶ編,1990:178-184]、[上野,1989]など。

<文献>

天野正子・桜井厚 1992 「3章 ナプキン『汚れ』の呪縛をとく」『「モノと女」の戦後史』 有信堂.

Douglas, Mary 1969 *Purify and Danger*, Routledge & Limited. =1985 塚本利明 訳『汚穢と禁忌』 思想社.

George, Alison & Murcott, Anne 1992 " Monthly strategies for discreon shopping for sanitary towels and tampons ", *The Sociological Review* 40-1:146-162.

後藤節子 1993 「月経不順」『産婦人科の実際 臨時増刊特集23号』42-7 金原出版, :963-967.

蒲田久子他 1990 「I 孕む以前」『日本人の子産み・子育てーいま・むかしー』 頸草書房.

川村邦光 1994 「3 オトメのセクシュアリティ」『オトメの身体ー女の身体とセクシュアリティー」』 紀伊国屋書店.

Kittredge, Cherry 1987 "Womansword : What Japanese Words Say About Woman", Kodansya International. = 1990 栗原葉子・中西清美訳『日本語は女をどう表現してきたか』 福武書店.

森宏之 1988 『月経異常の臨床』 振興医学出版社.

波平恵美子 1983→1992 『ケガレの構造』 青土社.

_____ 1985 『民俗宗教シリーズ ケガレ』 東京堂出版社.

小野清美 1989 『ナプキン先生の素敵なマンスリーディを』 光雲社.

_____1993 『アンネナプキンの社会史』 JICC出版局（現・宝島社）.

瀬川清子 1980 『女の民俗誌・そのけがれと神秘』 東京書籍.

水牛くらぶ編 1990 「アンネタンポン」『モノ誕生』 晶文社.

上野千鶴子 1989 『スカートの下の劇場』 河出書房新社.

（かとう ともえ／筑波大学大学院）